様式Ｃ-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年６月２日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：18320002
研究課題名（和文）　宗教における時間、超越、倫理に関する哲学的研究

研究課題名（英文）　Philosophical studies on Time, Transcendence and Ethics in the Religions

研究代表者
高橋　哲哉（TAKAHASHI TETSUYA）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号 60171500

研究成果の概要：ユダヤ神学との関連で理解されてきたベンヤミンの時間論に、パウロやイエスの影響を確認し、「暴力批判論」の神的暴力の思想も含めキリスト教的に読み解く可能性を見出した。戦時下日本の宗教思想の分析から、神や仏の超越の経験が犠牲の観念を介して世俗国家へと内在化されることを確認し、キルケゴールのアブラハム的決断の思想を引くシュミット、ベンヤミン、デリダ等の系譜にその批判の方途が見出せることを確認した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2007 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2008 年度	1,700,000	510,000	2,210,000
年度			
年度			
総　計	5,700,000	1,710,000	7,410,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・　哲学・倫理学
キーワード：宗教、超域、倫理、キリスト教、犠牲、ベンヤミン、キルケゴール、決断

１．研究開始当初の背景

そもそもなぜいま「宗教」を問うのか？なぜ「宗教」を現代哲学によって根本から問い直す必要があるのか？

今日の世界で激化している「文明の衝突」、民族紛争、ナショナリズムのぶつかり合いの背景には「宗教」の存在がある。パレスチナ紛争、カシミール紛争、チベット問題などはもとより、社会主義圏の崩壊過程で生じた旧ユーゴスラヴィア紛争、チェチェン紛争など１９９０年代から宗教的相違を背景とした民族紛争が急増し、そして２００１年の「9.11 事件」以降、アフガニスタン戦争、イラク戦争など米国ブッシュ政権が発動した「対テロ戦争」によって、世界全体がユダヤ・キリスト教原理主義とイスラム原理主義

の対立に巻き込まれたかの様相を呈している。また、日本と中国・韓国などとの間でナショナリズムの対立の象徴となっている「靖国問題」を見れば、その根底に、神道のみならず日本と東アジアにおける宗教的伝統の問題や、国家と宗教の関係の問題が存在することは明らかである。

このような「宗教」を背景とする危機の克服をめざすためには、近代の知や思想が持っていた宗教否定、宗教を過去の遺物とみなすような態度を根本的に変更し、人間が「宗教」を欲し、必要とするのはなぜか、日常的意識や知や文化の他の形態と宗教との本質的差異はどこにあるのか、文明間、民族間の対立ではなく逆に和解の道を開くために「宗教」の中にいかなる可能性が存在するのか、といったことを哲学的に解明し理解する必要がある。本研究は、こうした関心に動機づけられたものである。

２．研究の目的

本研究の目的は、現代世界において著しく重要性を増している「宗教」の本質と、現代の知および人間にとって「宗教」が持つ意味について、現代哲学の総力をあげて究明する研究の第一歩を記すことにあった。そのために本研究は、宗教的経験の独自性をその「時間」性、「超域」性、「倫理」性という３つの観点から哲学的に解明することをめざした。

３．研究の方法

第一に、ハイデガーが「現存在の存在の意味」を「時間性」としたように、宗教的存在の本質はその「時間」経験に集約的に現われると考えられる。この点で本研究は、二十世紀の歴史的経験の中から登場した W.ベンヤミン、E.レヴィナス、J.デリダ、J.アガンベンといった重要な哲学者たちがそろって「メシア的時間」を問題にしたことに注目する。レヴィナスがユダヤ教を背景としているのに対して、J.アガンベンはその主著『残りの時間』（2000）においてベンヤミンの「今のとき」（Jetztzeit）の思想の背景にパウロのメシアニズムがあったことを明らかにし、その現代的意義を説くに至った。ハイデガーがその宗教現象学において展開したパウロの「生の様式」の解釈も、この文脈で再検討を要する。また J.デリダは、イスラム教を含めた「聖書の宗教」をアブラハム的宗教と呼び、その時間経験を普遍化し、「メシアニズム」と区別された「メシア的なもの」を、脱構築（ディコンストラクション）の経験と同一視している。本研究は、これらの「メシア的時間」の思想の意味を究明し、それが真に普遍性を持つ宗教的時間性なのか、仏教やその他の宗教における時間性との異同はどうなっているのかを究明する。

第二に、ユダヤ・キリスト・イスラム教であれ、仏教であれ、神仏の「超越」を語る点では共通している。この場合の「超越」とは「自我」の「内在」に対する絶対他者のそれであったり、「国家」や「世俗」や「自然」の「内在」に対する宗教のそれであったりする。近代の人間中心主義や主観主義・主体主義哲学によって、あるいは「世俗化」や「脱魔術化」の進展によって一旦は否定され、「内在」に還元されたかに思われた「超越」は、はたして宗教において真に「超越」でありうるのか？　科学的な「自然」への還元主義、近代「国家」の主権性に対して、宗教的経験の「超越」性がいかに確保されるのかを明らかにすることは、重要な課題である。

この文脈で、スピノザ、カント、ヘーゲル、キルケゴール、ウィトゲンシュタインらの哲学における「内在」と「超越」の関係を、宗教的「超越」との関係で再検討する作業も必要となる。

第三に、宗教は「超越」の経験に極まるだ

けでなく、「超越」を介して「世俗」に関わるとき、「倫理」的なものに新たな地平を拓く。宗教が、現代世界において「文明の衝突」、民族紛争、ナショナリズムのぶつかり合いの動因となるのではなく、文明間、国家間、民族間の和解と共存の可能性を拓くために、宗教的経験はどのような「倫理」を可能にするのか？　こうした観点から、東西の宗教的経験における「愛」、「慈悲」、「救済」、「贖い」、「赦し」、「喪」、「贈与」、「歓待」といった思想の本質を究明する。

４．研究成果

（１）平成１８年度

①「メシア的時間性」としての「今」について。大貫隆の聖書学研究により、イエスの生前の根源的経験とイエスの磔刑後に成立したキリスト教の物語の差異が明らかにされ、その中でイエスの「神の国」における時間経験が（過去が現在に先回りして未来から現在に到来する）というかたちをもつ「全時的今」であることが明らかになった。この「全時的今」はいわゆる「永遠の現在」とは異なり、現代のＷ.ベンヤミンの歴史哲学における「今の時」（Jetztzeit）に近く、ベンヤミンの歴史哲学の背後に独自のイエス解釈が存在する可能性もたかまった。この新しい知見は、さらにデリダ、アガンベンらの時間論との比較検討を進めることによって、大きく発展する可能性をもつ。

②犠牲（サクリファイス）の観念による「超越」の「内在」化。第２次世界大戦中の日本のキリスト教、仏教、および靖国思想の重要資料を分析することを通じて、神や仏の「超域」の経験が、「自己犠牲」の観念を媒介として、世俗国家へと「内在」化されていくプロセスが明らかになってきた。この「自己犠牲」の観念が、キリスト教ではイエスの死後の「贖罪」信仰の成立により、また仏教では「捨身飼虎」など釈迦の本生譚に見られる多くの説話の伝承により、キリスト教や仏教の伝統に根ざすものであることも判明した。宗教的な「超域」の経験を、いかにして「犠牲」の理論から解放するかを問うことの必要性が明らかになった。

（２）平成１９年度

前年度の研究で課題となったベンヤミンの歴史哲学とイエスないしキリスト教との関係を検討し、従来ユダヤ神学の影響だけが議論されてきたベンヤミンのメシアニズムをイエスおよびパウロのキリスト教の視点から読み解く必要が一層明らかになった。ベンヤミンの「歴史哲学テーゼ」に登場する「せむしの小人」がパウロではないかという大貫の仮説が検討され、それを確認するためにも、初期ベンヤミンの「暴力批判論」に登場する「神的暴力」とキリスト教との関係の究明がポイントであると暫定的な結論に至った。

ベンヤミン「暴力批判論」は暴力と法および正義との関係を追究しつつ「神」の「正義」にかかわる「神的暴力」の概念を導入したもので、ここからも、本研究のテーマの一つである宗教における倫理の問題系との関係が浮上してきた。前年度に問題化した「犠牲」の論理との関係で、ベンヤミンが「犠牲を要求する」「神話的暴力」と「犠牲を受け入れる」「神的暴力」を区別する場合の後者の「犠牲」の意味を、宗教的経験の具体的な場面でどう解釈できるかが重要な課題であることが明らかになった。

この年度の大きな成果は、キルケゴールにおける「信仰」と「責任」の逆説の意味を、「犠牲」の問題とも絡めて新たに照射する可能性が開けた点である。キルケゴールはカント的およびヘーゲル的な「普遍性」の倫理を「信仰の騎士」の立場から超越するが、それはシュミットやベンヤミン、さらにデリダや

アガンベン等、現代の決断主義の思想系譜の先駆と考えられること、しかも、キルケゴール的「決断」は単に「倫理」を放棄するのではなく、従来軽視されてきた『キリスト教の修錬』等の著作を精読すれば、「普遍的」な「倫理」と化した現代のキリスト教会を「勝利の教会」として批判しつつ、単独者のつながりあう「闘う教会」の理念を通して、現代批判の新たな「倫理」を提起していることが明らかになった。

（３）平成２０年度

宗教的経験における超域と倫理の問題に関して、今年度は特に１）ベンヤミンにおける「神的暴力」の概念の解明と、２）キルケゴールにおける倫理と信仰の関係の解明に重点を置く計画であった。

①「ベンヤミンにおける「神的暴力」の概念の解明

「神的暴力」の原語 götliche Gewalt の Gewalt を、従来のように日本語の「暴力」に近い意味ではなくドイツ語で元来そうであるように「権力」「支配」の意味を強調して読むことで、従来まったく不明であったこの概念の意味がはじめて了解されるのではないか、という仮説を得るに至った。ベンヤミンのテクストと同時期に刊行されたカール・バルトの『ローマ書講解』にも、「神の力と支配」Gottes Macht und Gewalt 等の用例があることからすると、「神的暴力」はむしろ聖書の最重要用語である「神の支配＝神の国」basileia tou theou の線で解釈すべきではないか。すると、「神的暴力」は単にいわゆる「暴力的」現象ではなく、裁き、赦し、恵みといった「神の義」dikaiosyune tou theou 全体をさすとも考えられる。「法的暴力」「神話的暴力」と訳されてきた概念、そして『暴力批判論』というテクストのタイトルも含め、統一的読み直しを可能とする仮説を得たことは大きな成果と言える。

②キルケゴールにおける倫理と信仰の関係の解明

キルケゴールによる創世記２２章の解釈、すなわちアブラハムのイサク奉献の決断に関する解釈をめぐって、普遍的な倫理のレベルを超えた、唯一者に対する単独者の決断を信仰の本質とするキルケゴールの解釈が、プロテスタント、カトリック、ユダヤ思想の枠を超えて、カール・シュミット、ベンヤミン、デリダなどの「決断」の思想の原型であるという結論を得た。さらに、これらの思想に共通する「メシア的なもの」としての「瞬間」の時間論と、福音書のイエスの「山上の垂訓」に見られるような現在中心的な時間論とが、どのように整合し、それが倫理的な責任の思想にどのような相違をもたらすのかを検討したが、結論は今後の課題となった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　11 件）

① 高橋哲哉、犠牲（サクリファイス）への問い－国家と宗教の関係において、キリスト教史学、62 巻、24-32、2008、有

② 大貫隆、トマス福音書語録 77 とグノーシス主義のアニミズム、聖書学論集、40 巻、61-90、2008、有

③ 門脇俊介、徳（virtue）をめぐって－ハイデガーとマクダウェル、1011 巻、97-109、2008、無

④ 山本巍、われわれに言語を語らせるものは何か：ヘラクレイトスの場合、ギリシャ哲学セミナー論集、5 号、53-70、2008、有

⑤ 黒住眞、「老い」について：倫理思想史からの問い、倫理学年報、57 集、79-96、2008、有

⑥ 黒住眞、本居宣長「もののあわれを知る」をめぐって、モノ学・感覚価値研究第 2 号(科研　モノ学・感覚価値研究会年報)、73-82、2008、

⑦ 大貫隆、教会と神学と聖書学：新約聖書学の立場から、日本の神学、46 号、254-258、2007、無

⑧ 黒住眞、平和への問い－初期の倫理思想から、平和研究 vol.32、2007、51-70

⑨ 山脇直司、ユートピア論再考：エンゲルス　モア　カンパネッラ、原初の言葉、165-194、2007

⑩ 大貫隆、苦難を用いる　パウロにおける十字架と苦難の神学、受難の意味 アブラハム・イエス・パウロ、1-68、2006

⑪ 大貫隆、救済史の物語と神義論－神教の落とし穴、一神教とはなにか公共哲学からの問い、183-205、2006

〔学会発表〕(計 15　件)

① 高橋哲哉、Reclaiming the Unconditional:Thinking Educaton in Japan、国際教育哲学会、2008.8/9、京都大学

② 高橋哲哉、招待講演　Le Japon d'après la guerre et la question du sanctuaire Yasukuni, in : Colloque sur les problèmes actuels des rapports entre la religion et l'Etat au Japon, 2008.4/4,L'Institut d'Asie Orientale de Lyon, France,

③ 門脇俊介、Ontology and Technology of the Invisible、アメリカ哲学会太平洋支部、2008.3/28、Pasadena Hilton

④ 高橋哲哉、招待講演「キルケゴールと責任の問題」、2008,3/20、全南大学哲学科、韓国・光州市

⑤ 高橋哲哉、招待講演「戦後責任とは何か」台湾交通大学社会文化研究所、2007.12/27、台湾新竹市

⑥ 高橋哲哉、招待講演「靖国―戦争責任論の限界」、日仏シンポジウム「植民地主義の過去、未来のための記憶」、2007.12/9、東京日仏学院

⑦ 高橋哲哉、招待講演「戦後日本とは何だったのか」、北京大学歴史学系、2007.9/24

⑧ 高橋哲哉、招待講演　Legacies of Empire : The Yasukuni Shrine Controversy, 2007.6/26 , Birkbeck College, University of London

⑨ 高橋哲哉、招待講演「靖国問題と歴史問題」、国際シンポジウム, Lieux de polémiques et lieux de justice, du sanctuaire Yasukuni à la Cour pénale internationale,discussion autour de Takahashi Tetsuya, 2007.3/17 , Université de Paris 8

⑩ 高橋哲哉、招待講演　Postwar Japan on the Brink : Militarism, Colonialism, Yasukuni Shrine, Inaugural Lecture, The Tetsuo Najita Distinguished Lecture in Japanese Studies, , 2007.3/6, University of Chicago

⑪ 高橋哲哉、招待講演　La question du Yasukuni-jinja, in : Les dénis de l'histoire et le travail de la mémoire, , 200612/2, Université Paris 8

⑫ 高橋哲哉、招待講演「メディア・権力・ポピュリズム―デモクラシーの（不）可能性について」国際シンポジウム「メディアとデモクラシー」、九州日仏学館・九州大学・西南学院大学、2006.9/30、福岡国際会議場

⑬ 高橋哲哉、招待講演　Nation and Sacrifice, in : Historia y Memoria, los usos del pasado en las sociedades

post dictatoriales, 2006.9/8 , Universidad Nacional de la Plata

⑭ 高橋哲哉、招待講演 Civilization of Co-Existence during the War Time ― in memory of a Japanese woman lived in the China-Japan War Time, 国際会議 The Interreligious Meeting of Assisi,, 2006.9/4 , Assisi,Italy

⑮ 高橋哲哉、招待講演「靖国問題の本質」、2006.3/14、中国社会科学院、

〔図書〕（計 12 件）

① 高橋哲哉・山影進（編）、『人間の安全保障』、東京大学出版会、2008、279 頁

② Tetsuya Takahashi, Can Philosophy constitute Resistance ? , Collection UTCP , 2008, pp.251

③ 大貫隆、岩波書店、『グノーシス-「妬み」の政治学』、2008、288 頁

④ 宮本久雄、創文社、『他者の甦り：アウシュヴィッツからのエクソダス』、2008、237 頁

⑤ 山脇直司、岩波書店、『社会とどうかかわるか』、2008、183 頁

⑥ 山脇直司、東京大学出版会、『グローカル公共哲学』、2008 年、250 頁

⑦ 大貫隆 、『イスカリオテのユダ』、 日本キリスト教団出版局、 2007、300 頁

⑧ 野矢茂樹、『大森荘蔵』、講談社、2007、236 頁

⑨ 大貫 隆,宮本久雄,山本巍,山脇直司,岡部雄三編、 東京大学出版会、『受難の意味 アブラハム・イエス・パウロ』、2006、 1-68

⑩ 大貫隆,黒住眞,金泰昌,宮本久雄編．東京大学出版会、『一神教とは何か 公共哲学からの問い』、2006、183-205 頁、

⑪ 大貫隆、岩波書店、『イエスの時』、2006 年、326 頁．

⑫ 黒住眞、ぺりかん社、『複数性の日本思想』、2006、543 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

高橋 哲哉 (TAKAHASHI TETSUYA)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号 60171500

(2)研究分担者

大貫 隆 (ONUKI TAKASHI)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号 90138818

山脇 直司 (YAMAWAKI NAOSHI)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号 30158323

黒住 眞 (KUROZUMI MAKOTO)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号 00153411

門脇 俊介 (KADOWAKI SHUNSUKE)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号 90177486

山本 巍 (YAMAMOTO TAKASHI)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号 70012515

今井 知正 (IMAI TOMOMASA)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号 50110284

信原 幸弘 (NOBUHARA YUKIHIRO)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号 10180770

野矢 茂樹 (NOYA SHIGEKI)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号 50198636

宮本 久雄 (MIYAMOTO HISAO)
上智大学・神学部・教授
研究者番号 50157682